
口（ボーボボのファンフィクション）

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーボボのファンフィクション

□

【Nコード】

N0736G

【作者名】

y

【あらすじ】

大好きな黒髪の少女を守りたいと願う小さな戦士は人型に変化する。そして「少女」に想いを伝えようとするが・

（前書き）

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」のファンフィクションです。各関係者・団体とは一切関係がありません

たったひとつだけ願いをかなえてあげましょう

それは誰もが夢見る魔法使いの一言

「邪ティ、お薬の時間だよー」

ノックの後、珍しく休暇を取った柊が扉を開け、窓際に座って本を読んでいる邪ティに声を掛けた

「ー帝国郊外の柊の邸宅

春のような日差しが室内に注ぎ込んでいる気持ちのいい室内

「・・・いない」

邪ティは柊の方を見ようとせず、本に目を落としたまま一言呟いた
「だめだよーちゃんと飲まなきゃー」

柊はつかつかと邪ティに歩み寄る。その手にはミネラルウォーターの入ったグラスと、白い袋

「アニキ・・・邪ティは今飲みたくなえんじゃねえか？」

邪ティの膝の上にちよこんと座っていたパンツ丸が柊を見上げる

「何言つてんの。これちゃんと飲まなきゃ、具合悪くなるんだよー
ーほら、邪ティ」

柊は邪ティの本を取り上げ、その手にグラスを持たせようとした

「・・・苦いから、いやだ」

邪ティはグラスを受け取らず、ふい、と外に顔を向けた

「あーもう、子供みたいなこと言つてないで、ほら」

柊は袋から薬を取り出すと、邪ティに持たせようとするが、邪ティは嫌がっていた

「・・・ア、アニキ・・・後で俺が飲ませるからよ・・・」

邪ティが本当に嫌がつているようで、パンツ丸はなんだか可哀想になつて、柊の手をくい、と引つ張つてそう懇願するように声を掛けた
「飲むわけないでしょー。この間だつて飲む、つて言つて飲まなくつて食事のときいきなり倒れちゃつたじゃん。僕すっごい慌てたんだよー。どーせ僕がいないときには飲んでないでしょー。・・・しょうがないなあ」

柊はパンツ丸の手を振りほどくと、邪ティの顎に手を添え、ぐい、と自分に向けさせた

「苦いからいやなんだね？なら苦さを感じないうちに飲み込んでやえばいいんだよ」

「・・・？」

そう柊は言つと、自らの口に錠剤を放り込み身を屈め、邪ティの唇に自らのそれを重ねた

「――わっ？！わわわ・・・な、何してんだよアニキ！？」

パンツ丸はその光景に慌てまくつた。柊と邪ティは口をくつつけて、顔を密着させて、動かないのだ。二人とも瞳を閉じて――柊は穏やかに瞳を閉じ、邪ティは苦しそうに強く瞳を閉じていた

「~~~~ん~~~~」

柊が唇を離すと、邪ティは唇をぐい、と拭つて、柊を恨めしそうに見上げた

「ほーら、苦くなかつたでしょ？」

「・・・うるさいな、もう・・・」

邪ティはイヤじゃなかつたのだろうか？口をくつつけ合うなんて――パンツ丸は混乱の感情で、嬉しそうな柊と悔しそうな邪ティを見上げる

「まだ嫌がるんなら、今度はこの粉薬も同じように飲ませてあげようか？」

「わかつたよ・・・飲むからそこ置いといてよ」

邪ティはベッドサイドのテーブルに視線を向けると、柊から本を取り戻した

「はいはい、いい子だね」ごほうびに今日のデザートは君の大好きなチョコ揚げパンパフェだからねー（太蔵もて王サーガから。これ本当に似たようなのが池袋のカフェにあるんだよね・・・）」

なんだよそのカロリーの塊は・・・と静かにツッコむ邪ティを見上げながら、パンツ丸は全く混乱していた。と、同時に、その光景を見た瞬間自分の体に妙な感覚が走った――邪ティはあんなことをされてイヤじゃなかったのだろうか？人間型の口は喋る為のもので、食物を入れる為のもので、呼吸をする為のもので――なんてあんなことするんだろう？

――自分には口が無いから分からない――

「・・・な、なあ邪ティ・・・？イヤじゃなかったのかよ・・・？」

柊が食事の用意に部屋を出て行った後、パンツ丸は嫌そうに粉薬を飲み終えた邪ティに問うた

「・・・何が・・・？」

邪ティはグラスを置き、パンツ丸を見下ろした

「だ、だってよ・・・口くつつけられたんだろ？」

？という表情

「・・・あいつはよくあーするよ。朝起きた時とか寝る前とか――別に普通のことだって柊は言ってたけどね」

次の日――

パンツ丸は邸宅の庭に一人座っていた。気持ちのいい青空が爽やかな風を運んでくる

普通のこと

そうなのか

人間型にとっては普通のことなんだ

いいなあ

柊のアニキはいいなあ

かつこいいもんな

邪ティにあんなことしてもいいんだな

いいなあ・・・

俺も・・・

ふう、とパンツ丸は溜息をついた（どうやって？）

そのとき

「ならばその願いを叶えてあげましょう」

不意に背後から声が掛けられた

「――？！だっ・・・誰だ？！ここは柊のアニキの敷地内だぞ！だれ――」

パンツ丸が慌てて振り向いた先には全身を黒いマントで覆い、三角の尖った帽子を被った人物が立っていた

「――はあ？」

余りの不条理な展開に気の抜けた声を出すパンツ丸にはおかまいなしに、その妙な人物は言葉を続ける

「私は魔法使い魔女っ子エスパー清美たん！あなたは小説構成の説明係としてとつても役に立ってくれました・・・ですから、そのごほうびにあなたの願いをたった一つだけ叶えてあげましょう」

「魔法使いなんだかエスパーなんだか分つかんねえーよ！」

パンツ丸は呆然としているが、その魔法使いと名乗った人物は、先端がウインウイン動くいぼいぼのついた魔法のステッキをぶんぶん振り回しながら、さあさあと詰め寄って来る

「ま、まさかテメエは――そんなイタいカツコしてやがるが――」

」

パンツ丸はそんな事を言う人物はたった一人しか思い浮かばなく

」

「残酷な時の流れの概念からもうすぐ。歳になっちまう作者か？

！……がはあ！」

「そんなことはど……でもいい！」

いきなりそのイタイ人物はパンツ丸にフリッカジャブを加え、その眼前にキツと立った

「さつさと願いを言えっつーんだよこのナマモノ下ネタキャラが！
テメエのお陰でなんとか長編駄文があがった礼をしてやるーっつー
んだからさつさと話進めんだよこのドグサレが……ッ！（ポル
ナレフ様風に）」

鞭のようにしなるフリッカーをシバパパパと加えられたパンツ丸は、
呆然とその人物を見上げていたが……

願い

その言葉に反応する

「……ほ、ほんとーか？本当に何でも叶えてくれるのかよ？……
ーぐばッ！」

魔法使い魔女っ子エスパー清美さんは詰め寄るパンツ丸にジョルト
カウンターを食らわした

「うるせエ！人間型になりてえんだろっが！おらさつさとしてやつ
から話進めるぞ！その代わり、往年の名作のセオリー＆大人の事情
で12時の鐘が鳴るまでだ！んでそれが鳴ったらこのふざけた擬人
化パラレル話は終了だ！分かったな！」

ホイサラサッサ♪

夕日が差し込み、部屋の調度品は全て黄昏色に染まっている

「・・・？」

ベッド端に座り、本を読んでいた邪ティは、部屋に迫ってくる騒々しい足音を察知した

「邪ティーーーーーぶ！」

ばん！と扉を開けて入ってきた物体は、その正面に出現した氷の壁に勢い良くぶち当たった

「・・・何者だ？」

邪ティは顔を抑えてごろごろと転がるその人物に冷めた視線を送った
「なっ・・・なに言っただよ俺だよ！分かんねーーーーのかよ！」

「・・・分かるのはお前が露出狂のヘンタイってことだけけど」
部屋に飛び込んだ人物はハツと自らの体を見る。確かに自分は何も身に着けていなかった

「わっ？・・・レディーの前でマジわりイ！あの魔法使いは服は作ってくんなかったからよ！ちよ、ちよっと待ってるよ？アニキの服借りてくつから！」

そう慌てたように言うと、その人物はうおうお叫びながら部屋を出て行った

「・・・誰だお前・・・」

少女は自分の前に立つ、息を荒げた少年に声を掛けた

「俺だよ！俺！柔らかか素材のナイスガイ！ブルーメランパンツ丸様だぜ！」

はあ？という表情の少女に、ぶかぶかの服を身に着けた少年は嬉しそうに声を荒げ、びっ！と自らを指差した

「・・・柔らかか素材は一ミリもないけど」

変わらず冷めた視線の少女に少年は慌てる

「俺なの！パンツ丸なのー！ー！イタイ魔法使いが俺を人間型にしてくれたんだよ！声で分かるだろ？」

確かにその騒々しい、子供そのものの声は少女のよく知っている声ではあった

「・・・ああそう・・・それでなんなの？」

表情を変えない少女の反応に少年は慌てる

「だ、だってすげえだろ？俺人間型になれたんだぜ？！これなら部屋のブレーカーにだって手が届くし、エアコンの風向きを変えることだって出来るし・・・」

せこい、とツツコミながら、少女は目の前で必死に自分に語りかける少年を見る。年齢や背丈は自分と同じくらいだろうか。大きな一重の三白眼に薄い筋肉しかついていない子供の体。目尻の刺青が元のパンツ柄を象っている。笑ったり喚いたり、感情の大きな行動に見た目よりも幼く感じられる少年だった

「それによ！この姿ならー！前よりずっとずっとお前を守れるぜ！嬉しいんだよ俺！」

その顔を真つ赤にしながら、少年は胸を張った。その声は確かに初めて出会った時から、小さな体と大きな勇気で自分を必死に守ろうとしていた相棒だった

「・・・よかったな」

少女は微笑んだ。少年の何よりも大好きな笑顔で

「・・・へへー」

少年は思わずその微笑に見とれる。そして、微笑を形作るその桜色の小さな唇に視線が集中した

「な、なあ・・・折角だからよ、俺と、どどど、どつかー！あ、遊びに行こうぜ！ダ・・・ダメか？」

ずい、と少女に近づいて少年はどもりながら少女に詰め寄った

「・・・いやもう夕方だし・・・明日でいいんじゃないか？」

「この魔法は１２時で解けちゃうんだよ！だ、だから、その・・・」

少女は必死に自分に懇願する少年を見る。彼は確かにとっても嬉しうだったし、出来る事ならその願いを叶えてやりたいが――

「・・・ごめんな、今日は夜、コントの打ち合わせがあるんだ」

少年の背景に、雷で打たれた模様のベタフラッシュが、天から降りてきた丸ペンで描かれた

「そ、そつか・・・そー・・・しかたねえよな・・・アニキと打ち合わせなら・・・オンエア近エもんな・・・」

少年は肩を落とし膝をつき、がつくりと頂垂れた。見ればその大きな瞳に涙を浮かべて

「・・・」

少女はその、先程までの元気な姿とは正反対の姿を見て、何だか可哀想になってしまった。

「・・・ならー打ち合わせの時間までここで遊ぼうよ。何したい？なんでもいいよ」

少女はぱたん、と本を閉じ、少年の肩に手を置き、その顔を上げさせた

「え・・・？う・・・う、んーあ、ありがと・・・」

促され顔を上げた至近距離には魅力的な微笑

何したいって

なんでもいいって

マジで？！

「・・・えーと何する？・・・カードバトルでもするか？それともボーボのDVDでも見ーーえ？」

少年はいきなりがばつ、と立ち上がると、少女の両肩に手を置き、そのまま少女の体を押した

「いいいい、いっこだけ！一個だけしてえことがあるんだ！」

少女の華奢な体をそーっとベッドに横たわらせ、少年はその綺麗な

瞳を見下ろした

「・・・なんだプロレスか？そーいえばサブミッションの本をこの間読んだけど・・・」

「ちっげーよ！この状況でそれはねーだろ！」

少女は全く慌てない。彼女にとつてこの、自分の上に乗る、真剣な表情で見下ろす少年に男性としての意識など全く無いからだ。弟のような、親友のようなー相棒に過ぎないのだから

ちつくしよお

分かってるよ！

俺は柊のアニキとは全然違うもんな！

でもよっ・・・でもよお

ちよつと位いいだろ？

ちよつと位触ったっていいだろ？

俺はお前のことがだいっすきなんだからよ！

「口くつつけさせろ」

先ほどもまでのどもりは全く消え失せ、驚くほど滑らかに言葉が出た

「柊のアニキとしてたみてーに・・・俺にもあれさせろ」

顔を真っ赤にして少年は無表情の少女に語りかけた

「・・・なんでそんなことしたいんだ？私はもう薬飲んだよ」

少女は、？という表情で少年を見上げる

「な、なんでつて・・・いーじゃねえかよ！フツーのことなんだろ？人間型ならっ」

何を言っているのか自分でも支離滅裂になっていると分かっているが、少年は半ばヤケで少女に顔を近づけた。その桜色に艶めく唇から視線を外せない

「・・・まあ、いいけど・・・別に」

少年の頭上にぱっ、と花が咲く。余りの歡喜に涙が滲んできた

「じゃ、じゃじゃじゃじゃあー」

少年は瞳を強く睨り、唇を窄めて震える顔をゆっくりと近づけた

やったあ

口をくつつけられるんだ

いいんだよな？いいって言ったよな今

うれしいぜええ！

いくら人間型にはフツのこことだっていったって

嫌いなヤツだったら一発で凍らせちゃうよな

ーイヤって言うよなきつと

なら

俺にも望みはあるってこー

「はいそこまで」

背後から響いた穏やかな声に、少年の体温は一気に急降下した

12時の鐘が邸内に響き渡りー

「ぎゃああああ！アニキ勘弁ー！！！」

元の姿に戻ったパンツ丸の悲鳴が、鐘の音を掻き消すか如くに響き渡っていた

「全く、ちよつと目を離すとすぐ調子にのるんだよねえこのパンツは。奥義・拷問罰ゲーム」

「擦れる潰れるこすれて無くなるー！！！」

パンツ丸は鋭角的なギザギザのついた石の上に縛り付けられ、柵はその体の上に二つほど錘をのせた

「やっぱり下着は陰干ししないとね」

「・・・陰干しっていうより、圧死しそうだけど」

楽しそうに錘を増やす柵の背後から、静かに邪ティがツッコんだ

「あのねえ、邪ティ。確かにあれは人間型には普通の挨拶の意味もあることだけど、誰それ構わずさせていいってものじゃないんだよ？変な所でズレてるんだから君は」

「・・・お前にいいんなら、パンツ丸だって別にいいんだと思った」溜息をつきながら、柊は更に錘を増やす。パンツ丸の悲鳴が木霊する「わー！ん！邪ティ助けてくれえええ！もうしません調子こいてましたごめんなさーいっ！」

パンツ丸の魂が少々抜けている。その様子に流石にやりすぎだと思っただ邪ティは柊の手を取った

「・・・もう許してやれよ・・・結局何もなかったんだから」

柊は見上げてくる邪ティの瞳を覗き込んだ後、ゆっくりと拷問器のレバーを上げた。パンツ丸の体の上から錘が外される

「しょうがないな、許してあげるけど・・・でも邪ティ、その代わり約束してよね。もう二度とあーいうことは僕以外にさせないってー！いいね？」

ほつれまくったパンツ丸の体を拷問具から外しながら、邪ティは柊の言葉に少々の疑問を持つ

「・・・お前ならいいのか？なんでだ？結局あーいうことは、どういう基準でさせていいものなんだ？」

邪ティは14歳の状態で生まれたばかりの赤ん坊に過ぎなかった。それから柊は常識的なことを邪ティに教え込んでいたのだが、それでもやはり普通に育った少女とは若干の常識の違いが現れているようだった

「それはその内ー！二人の時に教えてあげるよ・・・」

「ところで邪ティ、ずっと何の本を読んでいたの？」

ふと、柊が邪ティに問いかけた

「・・・これ」

すつ、と差し出された本の題名は

部下を旨く使える上司のアメとムチ

と、書かれていた

ちなみに、イタイ魔法使い魔女っ子エスパー清美さんは、その夜邪
ティさんのお部屋のベッドの上で、邪ティさんのランジェリーを被
りながら、魔法のステッキでお悦しみ中に、窃盗罪と家宅侵入罪の
現行犯で柊さんに逮捕され、終身刑に処されましたとさ

（後書き）

読んで下さってありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0736g/>

口（ボーボボのファンフィクション）

2010年10月11日21時14分発行